

武蔵野日曜集会

十字架上の七言

――ヨハネ伝第19章17～30節――

1985年3月10日

小池辰雄

イエスを十字架につく「彼らを赦し給え」「今日なんじは我と偕にパラダイス」「これはお前の母、これはお前の子」「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」「我渴く」「こと終りぬ」「父よ、わが霊を御手にゆだね」A41「十字架上の七言」

【ヨハネ19・17～30】

17 彼らイエスを受取りたれば、イエス己に十字架を負いて**欄腰**（へブル語にてゴルゴタ）という処に出でゆき給う。18 其処にて彼らイエスを十字架につく。又ほかに二人の者とともに十字架につけ、一人を右に、一人を左に、イエスを真中に置けり。19 ピラト**罪標**（すてふだ）を書きて十字架の上に掲ぐ『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と記したり。20 イエスを十字架につけし処は都に近ければ、多くのユダヤ人この標（ふだ）を読む、標はへブル、ロマ、ギリシヤの語にて記したり。21 爰にユダヤ人の祭司長らピラトに言う『ユダヤ人の王と記さず、我はユダヤ人の王なりと自称せりと記せ』22 ピラト答う『わが記したることは記したるままに』

23 兵卒どもイエスを十字架につけし後、その衣をとりて四つに分け、おのおの其の一つを得たり。また下衣（したぎ）を取りしが、下衣は縫目（ぬいめ）なく、上より惣（すべ）て織りたる物なれば、24 兵卒ども互（たがひ）にいう『これを裂くな、誰（たれ）がうるか鬪（くじ）すべし』これは聖書の成就せん為なり。曰く『かれら互にわが衣をわけ、わが衣を鬪（たたか）にせり』兵卒ども斯くなしたり。25 さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。26 イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、視よ、なんじの子なり』27 また弟子に言いたもう『視よ、なんじの母なり』この時より、その弟子かれを己が家に接（つ）けたり。

28 この後イエス万（ばん）の事の終りたるを知りて――聖書の全うせられん為に――『われ渴（かわ）く』と言い給う。29 ここに酸（す）き葡萄酒の満ちたる器あり、その葡萄酒のふくみたる海綿（かいめん）をヒソプに著けてイエスの口に差（さ）附（つ）く。30 イエスその葡萄酒をうけて後いい給う『事（こと）畢（お）りぬ』遂に首をたれて霊をわたし給う。



●イエスを十字架につく

17 彼らイエスを受取りたれば、イエス已に十字架を負いて**欄體**（ヘブル語にてゴルゴタ）という処に出でゆき給う。

「ゴルゴタ」というのは、この丘がちよつと頭蓋骨みたいな恰好をしている。丘の形からくるわけです。

18 其処にて彼らイエスを十字架につく。

非常に簡単に書いてありますが、大変な苦しみのあとです。このところはマタイ伝でいうと27章31節からです。

「31……十字架につけんとて曳きゆく。その出づる時、シモンというクレネ人にあいしかば、³²強いて之にイエスの十字架をおわしむ。」（マタイ27・31）

32)

とある。キリストが倒れられたらしい。あの「ヴィア・ドロサ」（苦しみの道）というのがあります。「クレネ」というのは北アフリカのギリシアの植民都市です。海岸から16キロぐらい離れているとかいうことですが、かなりユダヤ人が住んでいた。それがやって来たわけです。その前にさんざんキリストは嘲弄されているいろんな光景がことにマタイ伝には出ています。今度はルカ伝とちよつと関連したことが書いてある。

又ほかに二人の者をともに十字架につけ、一人を右に、一人を左に、イエスを真中に置けり。

これもイザヤ書53章に、

「¹²……彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ愆あるものとともに数えられたればなり。彼はおおくの人の罪をおい愆あるものの為にとりなしをなせり。」

とある。「愆あるものとともに数えられた」ということが具体的にこういうことになる。十字架の刑というのは一番極刑で、極悪人の処刑ですから。

19 ピラト罪標を書きて十字架の上に掲ぐ『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と記したり。²⁰ イエスを十字架につけし処は都に近ければ、多くのユダヤ人の標を読む、標はヘブル、ロマ、ギリシヤの語にて記したり。²¹ 爰にユダヤ人の祭司長らピラトに言う『ユダヤ人の王と記さず、我はユダヤ人の王なりと自称せりと記せ』²² ピラト答う『わが記したることは記したるままに』

²³ 兵卒どもイエスを十字架につけし後、その衣をとりて四つに分け、おのおの其の一つを得たり。また下衣を取りしが、下衣は縫目なく、上より惣て織りたる物なれば、²⁴ 兵卒ども互にいう『これを裂くな、誰がうるか鬪にすべし』これは聖書の成就せん為なり。曰く『かれら互にわが衣をわけ、わが衣を鬪にせり』兵卒ども斯くなしたり。



これは詩篇22篇18節に出ている。

「¹⁸かれらたがいになが衣をわかし我がしたぎを圍にす。」(詩篇22・18)
と。そして、

「わが神わが神なんぞ我をすてたもうや」(詩篇22・1)
と。これも詩篇22篇ですね。

兵卒ども斯くなしたり。²⁵さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。

「マリヤ」という名前はやっぱりたくさんあったんだね。

²⁶イエスその母とその愛する弟子
もちろん、ヨハネのことです。

との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、視よ、なんじの子なり』

「私は地上にはいなくなるから、これを汝の子だと思え」
ということですよ。

²⁷また弟子に言いたもう

ヨハネに言われる。

『視よ、なんじの母なり』

「お前は、これを母としていたわつてくれ」

というわけでしょうね。

この時より、その弟子かれを己が家に接けたり。

「この弟子」というのは自分のこと、ヨハネのことです。

²⁸この後イエス万の事の終りたるを知りて――聖書の全うせられん為に――

『われ渴く』と言い給う。

これは詩篇69篇21節に出ている。

「²¹かれらは苦草をわがくいものにあたえ、わが渴けるときに酢をのませたり。」

(詩篇69・21)

と。不思議に旧約とあうわけです。なにもいちいち意識なさったわけではないでしょうけれども。酸っぱい葡萄酒をキリストに飲ませようとしたけれども、キリストはそれを飲まなかったということはマタイ伝27章に出ています。これは喉の渴きを多少やわらげる意味でそういうことをするけれども、キリストはそれを受けとらなかったという。一種の麻酔的な意味です。麻酔的な意味をキリストをしりぞけた。

²⁹ここに酸き葡萄酒の満ちたる器あり、その葡萄酒のふくみたる海綿をヒソ
ブに著けてイエスの口に差附く。³⁰イエスその葡萄酒をうけて

ここでは、受けたと書いてあるが、別なところでは受けてないけれども。最後には受けられたのかな。



後いい給う『事畢りぬ』遂に首をたれて霊をわたし給う。

これは最後の言ですね。しかし、七つの言の順序が果たしてどうかははっきりわかりません。「事畢りぬ」というのはヘブライ語では、「クッラー」と言いまして、

「もうこれですべてだ」

という「オール」という字からきているんです。「終った」と。

●「彼らを赦し給え」

七つの言というのは何かということ、共観福音書の方も見てみましょう。ルカ伝23章

33節、

「³³ 憫憫^{されしうべ}という処に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、

一人をその左に十字架につく。34 斯くてイエス言い給う『父よ、彼らを赦し

給え。その為す所を知らざればなり』(ルカ23・33～34)

「父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり」

と。これが最初の言らしいですね。自分を十字架につけたのはとんでもない間違いだと。これは本当に反逆の罪ですよ。義人をほふったんですから。

「汝ら、敵を愛せよ」

とキリストが言われたが、「罪びと」はキリストにとっては、ユダヤの官憲にしろパリサイ人にしろ祭司たちにしろ、ついには民衆もみんな敵になってしまったわけです。弟子は敵ではありませんけれども。ユダは全く敵になってしまった。裏切り者です。そういった、「敵を愛せよ」と言って、正にキリストは敵を愛し、しかもその罪を赦した。これはもう神の子でなければ、できない言です。

「彼らを赦し給え」

という。「赦し給え」というのはただ神さまにお願いしているばかりではなくて、

「この私の犠牲によつて、私の十字架によつて赦してやってください」

ということとです。「赦し給え」の前に、キリストは十字架にかかるという贖罪の行為があるわけです。

「初めに行為あり」

とゲーテが言いましたが、正にそうなんです。それから「赦せ」という言が出てきた。赦しの行為が十字架です。赦しの行為のできる義人のこの犠牲。神さまはむしろ、聞くどころではない。それは神さまの実は本願だった。本願にキリストは従ったんです。この

「赦し給え」

の御言は完全に力を持っている。この一言でもつて我々は罪を赦されたわけです。あらゆる罪から、また我執という罪の根本から赦された。

だから、私たちは無罪、罪が無くなった無罪者なんだ。罪の無いという根本現実を賜つ



てしまった。私が、

「無を賜[、]つてゐる」

と言うのはそのことなんです。悟りでも何でも無い。無は賜[、]つた。罪から解放された。罪からの自由という、そういう無を賜[、]つた私はなぜ、「無」なんて言うかというところ——この無はそこを誤解されるんだ——何か悟って自我がなくなる、その境地に心理的に入るような、そうじゃないですよ。そんなのはまたすぐ曇[、]ってしまう。そんなのはご苦労さんなはなしなんだ。もう事実として賜[、]つたんだから。賜[、]ると、その事実に基づくと、こっちはぶつ倒れる。本当は平伏すどころのさわぎではない。ぶつ倒れると今度は、本当に立ち上がらせられる。

これは、

「十字架という言は」

とパウロが言っただけでも、

「十字架というその行為的表現は」

ということなんです。「初めに行[、]為あり」というのは、ゲエテはそこまで考えて言っただけは別問題ですけども、とにかく、「行為」というのはそういうことです。

だから、「赦[、]し給え」は実力を持った言です。

「その為[、]すところを知らざればなり」

と。知らないどころのさわぎではない。大間違いをしている。十字架上の第一の言はそれです。もう十字架上の言で福音が全部ちゃんと入っている。しかも「七」という天的な数なんだ。

●「今日なんじは我と偕にパラダイス」

二番目がこの盗賊との会話です。これは『無者キリスト』にも書いてありますから、お読みください。まん中にキリスト、両脇に他の十字架。こっちは傲慢なやつ。

「お前は神の子なら、お前自身と我々を救[、]つたらよからう」

なんて傲慢なことを言っただけ。

「³⁹十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏^{そし}りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』⁴⁰他の者これに答^{こた}え禁^いめて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏^{おそ}れぬか。⁴¹我らは為^なしし事の報^{むく}を受くるなれば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為^なさざりき』⁴²また言う『イエスよ、御国^{みくに}に入り給^{たま}うとき、我を憶^{おも}えたまえ』

もう片一方は、怪しからんことを言っただけをやつつける。それから、キリストに向かつて

「御国に入りたもうときに、せめても私を憶えてください。申し訳ありませんでし



た」

と、最後の瞬間に心が砕けたら、

43 イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに
在るべし』(ルカ23・39、43)

「われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスだ」
と。これが第二番目の素晴らしい言です。

「今日子」という名前はいい名前だね。毎日、今日、今日というときにキリストと一緒にいれればいいんです。何も最後の瞬間でない。この盗賊は最後の瞬間に天界に入ってしまった。キリストと一緒に最初に天国に行ってしまったのはこの片一方の盗賊です。マイナス99の生涯を送って、最後にプラス1でひっくり返った。

我々、生まれつきの人間というのは相対的でね、どうにもなりませんよ。どうにかなるのは、上からの力によるだけのなし。だから、「傲慢か、心が砕けるか」——申し上げているとおり——人類はこの二つに別れる。人間を二分する一番根底的な分け方は何かというと、

「心が砕けるか、砕けないか」

だけ。自己主張しているうちはダメ。キリストは砕けそのものだから、始めから。

「わが意に^{おこころ}あらず、汝の御意を^{みこころ}。私は何もできません。何も言えません」

と。徹底的なんだ。全部、上から来ている。まあ普通のキリスト教でこんなことを徹底的に言う人はほとんどないようだ。私だけのようだね。私はキリストを語っているの、自分を語っているのではない。キリストはそういう人だ。それが「幼児の心^{おきなこ}」だと。

先生の言うことを無条件に「はい」と聞いている。昔は本当にそうだったね。私たちは先生を批判するなんてことは全然考えなかった。この頃は何だかしらないけれども、てんでダメだ。幼稚園、小学校の教育が一番大事なんです。幼稚園、小学校の教育を間違えてしまうと、中学校からではもう遅い。だから、あんなしょうがない中学生がたくさんいるわけだ。中学生が悪いのではない。もともと教育者の責任なんだ。

「教育は教育者なり」

と私は言いたい。教育者と親の責任。人間の環境・運命はいろいろだから。けれども結局はその個自身の問題です。

「汝自身を知れ」

という、デルフィーのあの言葉もやっぱりそれに関連してくる。自分自身を知ると、

「ああ、われ悩める人なるかな」

というパウロの言葉。

「私は何も知らないということが分かった」

というソクラテス。どのみち、行き詰まるんです、個を見つめてみると。個を見つめて、そして、まじめな人はヘタすると自殺する。行きどころがなくなつて。芥川龍之介なんて



のもその一人でしょう。そうでないものはいろんなことでごまかす——と言うとわるいけれども——いろんなことで何とかしているはなしだ。

行き詰まって、自殺しないで、次元の違ったところへ突き抜ける。これがみんな宗教家です。哲学者は思索で終わるけれども。思索では終わらないんだ。この次元のところへ突き抜ける。第一流の宗教家は、東にも西にもみなこの関門を突破した人です。何も宗教家にかぎらない。我々一人びとりがこの関門を突破すればいい。突破させられてしまう。突破するのではない。聖霊がやってくるから、突破させられてしまう。自分ではなかなか突破なんかできない。突破しようと思ったら、ここにぶつ倒れる。ぶつ倒れると今度は、上から聖霊がやってくる。

「このぶつ倒れをちゃんと、私はお前の代わりに倒れてしまったではないか」

というのが十字架なんです。そうすると、この十字架という憐れみの事実にぶつかって、今度は自分で自然に倒される。「参りました」と。だから、

「降参しなければ福音の世界には入れませんよ」

と私が言うのはそのことなんです。そうすると今度は、光がやってくる。これは聖霊です。だから、十字架と聖霊は絶対分けることができない。ところが、十字架でお終いになっている信仰がたくさんある。十字架が観念だから。本当にぶつかってないから。

「ああ、そうですか。十字架は罪の贖いですか」

と、命題を信じているだけです。命題を信じていたってダメだよ。わるくはないけれども、力が来ない。

具体的なキリストの十字架にぶつかって、片一方の盗賊は、

「申し訳ない。あなたはこんな……」

と。この盗賊は本当の贖いのことをそこまで分かったわけではないでしょうけれども、とにかく、「申し訳ない」くらいのところで。ところが、キリストはそいつをどん底から受けとって、

「お前は今日、私と一緒にパラダイス。天界に行く」

と。キリストの無条件の福音です。

「お前は今までこんなことをしたから、もう少し待て」

なんて言いやしない。

「さあ、今日行くぞ」

と。そういう気合は人の中にはなかなかないね。もう、すぐ勘定する。プラス・マイナスをいろいろ量る。そんな量りはいらないんだ。

すべて全的なんです。全的にぶつかっていると、キリストは全的に受けとる。

「どんな人か？」

と思つて桑の樹に上れば、



「ザアカイよ、お前のところへ今日、行くぞ」と。そういうわけで、みんな気合の世界です。

「今日、汝は我と共にパラダイス」

私はこの言葉が大好きだ。私が死んだら、私の墓標にこの言葉を書いておいてもらいたい。

「あんたも早く来なさい」

なんて（笑）。

これが第二番目の言です。毎日、私たちは、

「今日、お前は私と一緒にパラダイスを歩いている。地上はどんな運命・環境であろうと、どんな現実であろうと、パラダイスだ。私と一緒にいるところはパラダイスだぞ」

と。毎日、パラダイスなんです、私は。あなた方も。

●「これはお前の母、これはお前の子」

第三番目は――別に順序がはつきりしているわけではありませんけれども――ヨハネ伝の、

「これはお前の母だぞ。これはお前の子だぞ」

というキリストのあの言。ということは、みんなキリストにあつては、我々は本当に兄弟姉妹であると同時に、母であり子であるという深い家族的な天的な、キリスト族の関係だね。我々はそういう親しみをみんな持つてください。そういうのが本当のエクレシアなんです。

●「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

四番目は、これは凄い言だ。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」

という言。これはヨハネ伝にはない。不思議だね。マタイ伝27章46節、

「46三時ごろイエス大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言い給う。

わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いしとの意なり。」（マタイ27・46）

「ラマ」とか「レマ」とか言うが、これは方言の上の母音の差です。

ある写本には、

「今日、汝我と共にパラダイスにあるべし」

の前に、

「心安かれ」

という言があるのがあるんです、「安心しろ」と。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」



と、これは詩篇22篇1節の有名な言葉ですね。マルコ伝は15章34節、やっぱり、午後の三時だ。

「⁴⁷そこに立つ者のうち或る人々これを聞きて『彼はエリヤを呼ぶなり』と言う。」(マタイ27・47)

なんて言っているが、そういうことではない。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」と、なぜ、こんなことをキリストは言われたか。「これは神の義を行じたキリストの叫びである」

と私は言いました。神さまに徹底的に従ったことが義でしょ。ただ一人の義人でしょ。その義が本当は破られてはいけません。いきなり天界に行つていい。いきなり天界に行つていいキリストが贖罪のために棄てられた。羔^{こつと}としてほふられた。それは愛の極みだけれども、しかし、愛の奥にひとつの叫びがあった。それは義の叫びです。本当は絶対に棄てられてはならない。キリストは棄てられるはずのものではなかった。それをはっきりと、

「なんぞ棄て給いし」

と叫んだ。義の叫びです。これは天地を貫く義です。この義が立たなかった。十字架の、

「赦せ」

というのは横の線、

「なんぞ棄て給いし」

は縦の線、これが十字架。義と愛がクロスしているわけです。棄てられるのは罪びと、我々なんです、本当は。我々は棄てられてしかるべきなんです。けれども、その棄てられるはずのものがみんな救われてしまつて、いきなり天界に行くはずのものが棄てられたという、絶対矛盾。だから、その義の叫びが、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

です。

「キリストは苦しくなつてこう言った」

なんて、そんなことではない。もの凄いです、この叫びは。天地の軸が折れてしまう。

●「我渴く」

十字架にかけられて一時間も二時間もたてば、血が流れているから——血が流れて三分の一以上になると人は死ぬでしょ——だから、

「我渴く」

なんです、第五番目の言は。流血のためです。愛の血です。血は流れて地面にしみ入った。

今度は、私たちは、「我渴く」というのは別な意味でとらなくてはならない。

「私はあなたに渴いています」

と。キリストに渴かなかつたらダメです。この世のもので満足してしまつて、飽食してし



まっつてお終いでは。キリストに飢え渴かなくては。

「我を飲め、我をくらえ」

とはそのことです。キリストに対して渴き飢える者は満たされる。

「義に飢え渴く者は満たされん」

とキリストは言われた。キリストに渴いてキリストの所に来ると満たされて、泉が湧きだす。

「わが水を飲む者は渴くことなし」

という。そういう

「我渴く」

に我々は切り替わる。キリストは――血は生命ですから――生命が流れているんですから、キリストの生命をいただいでいく。地面が吸ったのではダメなんだ、我々が吸わなくては。

●「こと終りぬ」

六番目は、

「こと終りぬ」

です。完成。「これでみんなだ」という言です。

「私のすることはこれで全^{すべ}てだ」

それが「こと終りぬ」です。これはキリストの愛の業が全部これで完了したことを意味する。

●「父よ、わが霊を御手にゆだね」

それでキリストは、「こと終りぬ」のあとで、第七言を発せられた。

「父よ、わが霊を御手にゆだね」

と。これはルカ伝23章46節、

「46 イエス大声に呼ばわりて言いたもう『父よ、わが霊を御手にゆだね』斯く

言いて息絶えたもう。」（ルカ23・46）

これは詩篇31篇5節と同じ言葉です。

「5 われ^{たまひ}靈魂をなんじの手^{みて}にゆだね。エホバまことの神よ、なんじはわれを贖

いたまえり。」（詩篇31・5）

詩篇には、

「なんじはわれを贖いたまえり」

という言葉がある。これはキリストは言う必要がない。キリストが贖ったんだから。

「父よ、わが霊を御手にゆだね」

と。それで天界に行かれた。

けれども、大声をもういっぺん出したらしいな。その時に、至聖所と聖所の間の幕が二つに切れた。マタイ伝27章50節から、



「⁵⁰イエス再び大声に呼ばわりて息絶えたもう。

「再び」と書いてある。「大声に呼ばわりて」と。これは異言の声です。中身は分からない。そうすると、

⁵¹視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地震い、

地震が起きた。霊震だよ。

磐^{いわ}さけ、⁵²墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍^{しかばね}體^{たい}おおく活きかえり、⁵³イエスの

復活ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。」(マタイ27・

50～53)

という、エライことが書いてある。正に文字通り、驚天動地ですね。天は驚き地は動く。だから、キリストはまた甦^{よみがえ}って来ざるを得ないひとです。それから四十日間、弟子たちに現れて――ヨハネ伝の終りの方にペテロと会話するところが出てくるね――それから、天界に行行ってしまつて、

「お前たち、祈つて待つていろ、今度は聖霊として臨んで来るぞ」

と。まあ大変なことですよ。だから、

「聖書はもの凄い次元のドラマだ」

と言っているんです。教えでも何でもありません。

十字架上のこの七つの言は非常に内容が深い。これを冥想しているともう、福音の中にいつもそのまま入ってしまう。毎日、寝るときに、

「わがこと終りぬ」

と言つて寝られるかな。いつも何か残っているね(笑)。

「今日は今日の仕事を本当に終りました」

と言つて、一日を過^{すご}していけば大したものだ。

『明日、明日。今日ばかりではない』といつも怠^たけ者はそう言う」

というドイツ語の言葉がある。

「明日があるから、まあいいや」

なんて。よくはない。

●A41「十字架上の七言」

昨日、夜の12時をすこし過ぎてから、私はこの七つの言を冥想していると、また詩ができてしまった。それを今、読みます。

A41「十字架上の七言」(1985年3月10日作 讃美歌136「血潮したたる」の調べで)

1 あやしき雲に 空は暗み

ゴルゴタの上^えに 立つは何ぞ

十字架は三基^き 何の徴^{しるし}



- 2 罪ひと左右 義人真中
「汝はキリストか いざおのれと
我らを救え」
声に応えて 「我らは罪！
汝畏れよ 神の聖名を」
「主よキリストよ 憶えたまえ
み国の旅に 昇るときに」
「よき告白ぞ 我と共に
汝れは今日しも パラダイスぞ！」
地の罪ひとを 執りなしてぞ
十字架のイエス 叫び給う
「道に外れし 彼らなれば
ゆるしたまえや 父よ神よ」
ヨハネを見詰め マリヤに言う
「女よ見よや これは汝が子」
ヨハネに向かい かくはさとす
「母の MARIA は 汝が母なり」
天地晦冥 午後の三時
「わが神 み神！ 何ぞ我を
見棄て給いし！」 かく叫べば
雷光雷鳴 これに応う
血潮したたり 地に沁み入る
「ああわれ渴く！」 血の呻きぞ
「事は畢りぬ」 愛の叫び！
あがなひの業 ここに成りぬ
「わがたましひを ゆだねまつる
父よ神よ！」 大音声！
聖所の幕は 震い裂けぬ
天地ともに 霊に震う